

interview

中嶋 嶺雄

中央教育審議会外国語専門部会主査、  
国際教養大学学長

千載一遇  
インタビュー

# 小学校英語の必修化が 後退することはない！

中教審外国語専門部会の責任者が語る今とこれから

去る3月31日の中教審外国語専門部会の報告は、必修化までをも見すえた小学校への英語導入について文部科学省の見解と方向性を示すものとして注目された以来、賛否両論うずまくなか、伊吹文明文部科学大臣の「必修化は不要」発言がここへ来て大きな波紋を投げかけている。小学校への英語導入をめぐる動きはどのように推移し、現在という状況にあるのだろうか。同部会主査で、英語導入積極推進派のおひとりでもある中嶋嶺雄氏にうかがった。

文／田中洋子  
写真／是枝右藤

## 来年度以降の 学習指導要領改訂に向けて 審議はまだ途上にある

本誌 小学校での英語必修化をはじめ、3月の外国語専門部会報告で示された方向性は、ほぼ確定的と考えていいのでしょうか。

中嶋 3月の発表はあくまでも中間報告で、最終的な答申が出るのはもう少し先のことです。ただ、必修化に向けた方向で検討することは、ほぼまとまっています。その具体的な条件整備に関して、これから議論をつめていくことになるでしょう。順調に行けば来年度の学習指導要領にもり込みたい、というのが目下の目標です。

もっとも我々は、かならずしも「必修化」をキーワードに議論しているわけではありません。将来に向けたわが国の英語教育はどうあるべきか、公教育全体のなかで英語教育をどう位置づけるのか、また、学習指導要領の改訂をどうするか。そういった広い視点からの検討も当然ふくまれます。

本誌 この報告のなかの、「小学校高学年から週1時間程度、領域または『総合的な学習の時間』で英語を教える」という部分は、ややもの足りない感もありますが、これらもまだ変わる余地があるわけですね？

中嶋 英語教育を本気で導入するなら、個人的には週1時間では少ないと感じていますし、少なくとも高学年では、正規の教科として導入できればと思います。より低学年から、きちんとした方針にそって教えることも検討すべきでしょう。理論的にも実践的にも十分整理し、責任者として提案するつもりです。

本誌 過日、伊吹文明文部科学大臣から、「英語必修化は必要ない。まずは国語」といった主旨の発言がありました。これにより、事態が後退する可能性は？

中嶋 大臣はもちろん、大臣発言に代表される意見は、一般の知識人のなかにも、中教審のなかにもありますから、真摯に傾聴し尊重したいと思います。

いっぽう外国語専門部会では、日本の英語教育につ



いて、真剣な研究や議論をつくしてきました。その積み重ねのうえで見解をまとめておりますので、軽々に妥協はできません。実情に配慮し、段階的にものごとを進めることは重要ですが、現行の英語教育体制のままでは、日本はほんとうに国際社会のなかでおいできばりになってしまいます。伊吹文科相のご真意をうかがい、よく話しあっていきたいと考えています。

国語が重要だという点は、私も同意見です。ただ多くの実験が証明しているように、英語と日本語は、いっぽうを取れば他方がだめになるというものではありません。中身のある、仕事で英語が使える人材を育てるためにも、日本語力の強化は必須です。私たちはけっして、英語だけにかたよった教育を推奨しているわけではないのです。

現在、日本の公立小学校は、「総合的な学習の時間」などを通じ、じつに93パーセントがなんらかの形で英語を導入しています。私学ではさらに進んでいます。その現実もふまえ、文科省では来年度に向け、37億円の概算要求をもって、本格的に英語教育の強化に取り組もうとしています。そういう流れができてくつあるのは確実で、あと戻りはできない動きだと思います。

## 大学新卒者のうち すぐ英語で仕事ができる人材は わずか0.25パーセント

本誌 そうした流れの背景として、文科省の取り組みの歴史をかんたんにご説明いただけますか？

中嶋 1999年から2000年にかけて、中曽根弘文文部大臣の時代に、「英語指導方法等改善の推進に関する懇談会」が設けられました。これが従来の英語教育を根本的に見直そうという最初の動きで、私はこの懇談会の座長をつとめました。続く遠山敦子文科大臣の時代にも同様の懇談会が設けられ、リスニングやスピーキングを強化する英語教育について議論し、提言しています。

文科省ではこれを受けて、英語が使える人材育成のために、戦略的なプログラム策定に向けて動き始めました。国際社会で活躍する人材が、わが国では決定的に少ないのです。たとえばTOEFL600点(PBT)以上の力があり、社会に出てすぐ英語で仕事ができる大学新卒者は、わずか0.25パーセント。これからの日本のエリートが国際会議で英語の答弁ができない、英語でビジネスをわたりあえないようでは困るのです。

国際語としての英語教育に本格的に取り組まなければならないという強い意識は、今日まで文科省でも受け継がれてきました。小学校への英語導入も、そのなかで数年間の検討をへて出てきた案件であり、最近になって突然思いついたように始まったものではありません。

本誌 小学校の英語教育に対するさまざまな反対論について、先生の考えをお聞かせください。

中嶋 小学校への英語導入について、「今の英語教育に問題があるのなら、中学での教え方を見直せばいいではないか」という意見があります。こうした議論からは、幼児教育の重要性という視点が欠落しています。さまざまな実験で裏づけられているように、できれば歳までに、自然に英語にふれることが望ましい。アジアをふくめ、諸外国ではみな幼児期から語学教育を考え、それにふさわしい対応をしているなか、中学からでは遅いと思います。

「中学英語を小学校に前だおしするのはいかなものか」という指摘もよくいただきます。しかし我々の中学時代、週4、5時間あった英語の時間は、今は週3時間、実際の授業は2.5時間と、おどろくほど減っています。中国、韓国、台湾など、身近な国や地域と比べても時間数がきわめて少ない。おぼえるべき基本語もたった100語と、グローバル化が進むなかで時代に逆行している状態です。背景には、学級活動への取り組みや、学校崩壊の問題といった中学校の実状があると思います。そうであれば、中学の英語の時間数をおぎなえるように、英語を小学校5、6年から正式に教科として導入することの考えに入れるべきでしょう。

「小学校で英語をやると、英語ざらいがふえる」という議論は、国語にも算数にもあてはまります。子どもの能力にははかり知れないものがあり、教育とはそれをどれだけ開発するかです。英語が加わったくらいで子どもがだめになるとすれば、それは教育そのものの敗北です。英語にかぎらず、教科をきらいにならない教育をおこなうことが重要で、「小学校から始めるからきらいになる」という問題ではありません。

東西冷戦体制の崩壊と時を同じくして、世界のボー



グレス化は一気に進みました。これはIT革命の時期とも重なります。グローバル化したこうした変化に対応する教育が、今、日本にも求められています。とくに英語はコミュニケーションのツールです。外国との交流は進み、日本社会も多様になって、国内にあっても日本語だけのコミュニケーションでは、こと足りなくなってきました。インターネットひとつを取っても、英語ができるかできないかで、ずいぶん違うわけです。ここで公教育が、一般国民をおいてきぼりにするわけにはいきません。

## 地域人材を活用した チーム・ティーチングを提言

本誌 小学校で英語を教える指導者が不十分との危機に対し、外国語専門部会はチーム・ティーチングを提言していますね。

中嶋 担任に何もかも押しつけるのではなく、ALT（外国語指導助手）や、海外からの留学生、外国で暮ら

したことがある日本人など、地域の多様な人材の協力を得て指導していこうということです。チーム・ティーチングでは、担任自身がきれいな英語を話せなくても、子どもへの指導は十分可能です。CD-ROMをはじめとする補助教材も、授業の助けになるでしょう。

ただ、義務教育にかかわる先生は将来的に全員、少なくともTOEFL550点（PBT）くらいは英語ができるようになってほしい。時間をかけても、そういう方向に持っていくべきでしょう。いずれは教員免許取得に英語を必須条件にすることまで、検討する余地があると思います。

本誌 保護者や子どもの英語にかかわるみなさんには、どのようなことを望まれますか？

中嶋 これまで日本の教育は、現実に進むグローバル化にはほとんど対応してきませんでした。英語教育も同様で、大学入試の問題がいくら解けても、実社会でまったく役立たないという英語環境が続いてきたのです。そういう教育をやっているだけでは、いずれ日本は世界に通用しなくなってしまいます。未来を生きる子どもたちが、より豊かな人生をすごせるよう、世界の動き、グローバル化の動きを見て、小さいうちからの英語教育という問題を真剣に考えていただければと思います。



中嶋 嶺雄（なかじま みねお）

1936年長野県松本市生まれ。国際教養大学学長。文部科学省中央教育審議会外国語専門部会主査。安倍晋三内閣が設置した教育再生会議メンバー。東京外国語大学中国科、東京大学大学院国際関係論課程を卒業。東京大学にて社会学博士号。1995年から2001年まで東京外国語大学学長をつとめ、パリ政治学院、オーストラリア国立大学、カリフォルニア大学サンディエゴ校大学院客員教授、アジア太平洋大学交流機構（UMAP）国際事務総長などを歴任。「北京烈烈」（サントリー学芸賞、講談社学術文庫）、「21世紀の大学—開かれた知の拠点へ」（論創社）ほか著書多数。

教えるためのアイデアいっぱい

# 子ども英語

定価 880yen

第1特集●世界で、日本で、クリスマスの楽しみ方、教えます

## 世界中が メリークリスマス!

世界のクリスマス探訪記

レッスンに取り入れたいアイデア5  
公認サンタクロース・インタビュー

第2特集●知りたい! 味わいたい!  
世界のクリスマススイーツ



What Do You Ask Him?  
みんなともだち  
Vol.9 イギリス

教材トピック●クリスマス

## Merry Christmas!

誌上講座

子どもの才能を引き出す絵本選び

—マルチプル・インテリジェンスを育てるために— 前編

千載一遇インタビュー●国際教養大学学長 中嶋嶺雄

## 小学校英語の必修化が 後退することはない!

—中教審外国語専門部会の責任者が語る今とこれから—

ふろく

リズム遊び  
クリスマス絵カード



アルク  
www.alc.co.jp